

ニク・ダグラス著『タントラ・ヨガ』

川田 熊太郎

文法書と辞書とを頼む杖として、ようやくサンスクリット語で仏典を読み始めた頃、幸いに手に入ったので、泉氏の校訂した梵文金光明最勝王経を、校訂者自身の訳本と漢訳本とを参照しながら読んだ。その時に得た印象は、梵本からの、明るい日光に照らされて白い砂地に咲いてゐる赤い芥子の花に喩えらるべきもの、そして、漢訳本のは、黄土に悠然として立つてゐる黒衣の人の姿とも言はるべきものであった。この印象の差異にはひどくおどろかされた。また普通には弁財天と言はれ書かれてゐる女神が、漢訳には弁才天とあるし、これの原語が *sarasvati* であることにもひどくおどろかされた。このような経験は私をして出来る限り原文に親しむべきことを教えたのであった。また別の機会に、古い仏書の一部に獅子が描かれてゐるのを見たが、動物園などによりて生きてゐる獅子を見て知つてゐる私には、それがいとも不思議な動物と

思はれた。それは似てゐなくもないが、私の知つてゐた動物ではないのであったから。しかし他の機会に見たインド彫刻の獅子は動物園の生きてゐるものよりも威風堂々としてゐた。この経験も私をしてインドのものを見よと教えたのであった。

勿論、これについては種々のことが言われる。(1)彼地にはあるも此地にあらぬものを知らずして描くことはできない。(2)また彼地のものが此地へ移されて、そのままに存在しつづけることは不可能なのであるから、それを此地の風土へ適応せしめ順化することが肝要である。これらの他にもなほ様々の点があるであらう。しかし現代においては、彼地へ行きて、其処にのみ有るものを見て知ることは、古代においてよりも遙かに容易になされうるのであらう。わづかな手懸を出発点として空想をほしのままにはならない。また適応し順化することは、物により事によりて

は如何にも良いことであるが、しかし、その際に必要なことは元のものが、先づ、良くとらえられてゐることである。このような認識は一朝にして成立するものではないであらう。少くとも私においては次第に出来上つたものである。

その間に私には仏教が教禅などの他に、顕密にも分けられてゐることが判明した。私としては、浄土教のほかに、殊に密教の感化の深い処で少年時代を過したので、その土地を離れた後にも、仏教と言へば、密教をも想起した、そして、そのことをも幾分なりと知るように心がけた、勿論、専門的に研究したのではないが。

このような潜在的な要求から、私は梶尾祥雲博士の『曼荼羅の研究』や『理趣経の研究』を、手に入るままに、読んだ。そして曼荼羅の内容の高貴性に触れる感を持った。或種の人々は密教を無下に斥けるが、密教はそのように斥けらるべきものではない、従つて曼荼羅もまた尊重せらるべきものである。

しかし、右の二研究書の内に在る数多くの図版を見てゐて感じられるのは仏や菩薩の尊容や持ち物が、シナ化せられ、ニッポン化せられてゐて、時には元のものを感得するに困

難なのではなからうかといふことであつた。如何にも適応、順化は良いのであるが、その結果として、その適応順化によりて造出されたものが元のものから余りにも離れてゐては、その物の意味の了解に苦しむこととなるのである。ソトバと五輪塔とは余りにも離れ過ぎてゐるのではないであらうか。大黒天とシバたるカーラとは二者間の同一性の発見に大なる努力を必要とするのではないであらうか。

更に哲学的に考察すれば、顕教は、多く、即心成仏であるかの印象を受けるのであるが、密教においては即身成仏が力説せられてゐる。この差異は如何にして消去せられうるのであるか。

このような、時に念頭に浮ぶ諸問題を急に解決できないので、おのづから解決の見出さるる日も来るかと、ときどき思ふことがある。

それ故、様々の試みもなされたのであるが、画像の探究や建築や彫刻など美術の愛好心にも基づいて、Bhattacharya, B: The Indian Buddhist Iconography などをも読む機会をえた。勿論、多くの問題は依然として未解決のままである。故に、そこはかとなく、文献の

探索はつづけられてゆく。この探索の間にふと注意を引いたのが此処で紹介しようとする新刊書である。言うまでもない事であるが、私の行動は、今日流行してゐるオッカルト・ブームや超能力とは全く無関係である。そのような事は、それをなす能力のある人にまかせておけば良いことなのである。

書名 Tantra Yoga 一冊。25×17. 108 Rs
著者 Nik Douglas

発行所 Munshiram Manoharlal, New Delhi
初版 一九七一年一月

著者に就いて。

著者ニク・ダグラスは、イングランドにて生誕し、中東にて養育せられた。早くより彼は考古学、エジプト学を、またスピリチュアリズム、オッカルトイズム及びミステイシズムを学んだ。彼はヨーガの生きてゐる伝統を求めてインドへ旅行した。そしてタントラへイニシエイトせられた。そしてこのヨーガは、五ヶ年以上も、彼にとりてインスピレーションの源泉であつた。彼は、本書の他に、最近に「タントラ」と名づけられるフィルムを完成した。彼は現に(一九七一年)インド

及びその隣接の諸地方において探究を続行してゐる。

ベノイトシュ・ブハッタチャリアによれば、タントラの教養はインドが世界の文明に寄与した最大の貢献である。未来の時に、人が心の展開、霊の進歩、または自己の内に潜在してゐる呪術的諸能力をめざめしめる必要に気がつく時には毎時でも、人々の目は必ずや向かうであらう、サンスクリット語の文献のうちこの部分へ、またインドが今もなお所有してゐる少数のヨーガ者達へ。そして其処に極めて徹細な、徹底してゐる、正確な、容易な、そして実行せられうる心の訓練の体系を見出すであらう。そしてその体系は、あらゆる所とあらゆる時とにおいて人によりて把握せられた体系のうちの最勝のものである。

また著者によれば、「タントラ」"Tantra"といふ語は織り合せて展開する過程を意味してゐる。内と外との世界、小宇宙と大宇宙とは織物の内と外との側面の如きものである。この織物は、我々の宇宙を構成する総べての要素と能力とから成立してゐるのであつて、タントラ・ヨーガの実行によつて意識的に織り合

はされうる。「ヨーガ」Yoga は結合を意味する。内と外とが参加して結合すること、これはタントラの実行によって生起せしめられるのであるが、これは、東においても西においても総べての神秘的呪術的体系の達成しようとする目標である。

また実在といふものは常に変化してゐる諸の力の流れであるにすぎない。諸の要素、諸の能力、諸の現象、諸の出来事や諸の行為は不断に作用しあつてゐる。総べての物の調和に本来的に内在する諸の原理に従える意識的努力によりて、実在の表層に新らしき状態を造出することができる。これこそがタントラが人々に告知しようとする所のものである。タントラの教へるものは直接なるヨーガ経験の報知——宇宙的結合の報知である。この諸経験は大いなる知識と智慧とを啓き示すものである。

本書は上質のアート・ペーパーを用いたる百二十五頁から成り、やや大なる活字で印刷せられてゐる。

章は四であり、

第一章 起源と展開

第二章 宇宙論と意識の進展

第三章 音声のタントラの把へ方

第四章 修習——タントラ・ヨーガの実

践。

そして最後は文献の五頁と感謝の一頁とである。

その文献を見るに新らしい諸学者の研究書の主なるものが挙げられており、また感謝を受ける人々はタントラ・ヨーガに関して重要な人々と助力者達と出版社とである。これ等は本書の内容が、勿論異論は出るであらうが、信頼せられて良いものであることを外から示してゐる。

各章の叙述は簡明な文章でなされてゐる。

しかし、そのために、その了解にはいくらかの準備知識を必要とすると思われる。しかし各章の散文の叙述に直続して十頁前後のカラーの写真が、多くは一枚大のものであるが、ある。これは、一面においては確かに本文の図解であるが、他面から見れば、それらの写真が読解せらるべきものである。この後の点は、それらの写真が著者自身のとりたるものであること、また前述の如く著者は「タントラ」と名づけられたフィルムを完成してゐることからして明らかである。即ち著者は文字を以て説明するとともに、読者が彼

の意図に従つて図像を読むことを求めてゐるのである。故にそれらのカラー写真はたしかに「みごたえ」又は「よみごたえ」を持つてゐる。写真には絵画、彫刻が多いが、現実の修行者のもあつて、我々の心を宗教美術の領域に閉ぢ込めておらずに、現実に直面させてくれる。この意味ではそれら多くの写真を順次に読んでゆくことが楽しき勉強である、といふのは、各々の図像はどの時代のもの、何を示してゐるかの説明が図像の下にあるのみならず、その図像を理解する指針となる言葉が古典から引用して上に掲げられてゐるからである。

次に各章の内容を紹介すべきであるが、コピー・ライトに触れることの恐れと、事柄が秘密にわたる事が多く、邦文にすることがはばかられることとの故に、興味を持たれた方々は自分で読まれることをお勧めして置いて、タントラヨーガの起源と展開とに関する第一章の内容のみを簡潔に紹介するに止める。

タントラの起源は、どちらかと言へば、曖昧である。地球上の初期の文明の内にありて

は呪術的行為が勢力を持つてゐた。インドといふ亜大陸においても宗教的呪術的行為が極初の時以来展開して来ていた。それはアニミスト的性質のものであった。それよりも後に神々や女神達や呪術者達が世の人々から尊敬せられた、そして時の経過につれて彼等の業績や行為の仕方などが神話となつた。これは、ハラッパやモヘンジョダロにおける発掘によりて明らかとなつた。そこに見出された多くの像のうちには伝統的なヨーガの姿勢をとつてゐるもの、ヨーガ哲学が既によく発達した時に用いたサインを示すものがある。また其処に見出された物は、男性原理及び女性原理の崇拜が体系化せられたヨーガの哲学的土台の根底にあることを示してゐることである。これはシバ派の及びシャクティ派の宗教の発展によりて、一層、明白となつた。前者は比較的早く成立したのであるが、後者の成立はアーリヤンの侵入以後のことである。彼等は彼等自身の信仰や儀式を持つて来た。そして彼等がドラビディヤンと混合したと同様に信仰や儀式も混合した。その結果としてヒンドゥーイズムが成立したのである。

シバは、アーリヤンの英雄ではないが、ヒンドゥの神殿の内へ受け容れられるに至つた

のである。サティ、即ちシバのシャクティ、の父たるプラジャーパティの行つた儀式にシバは招待されてゐない。これは彼がアーリヤン系統の者でない事を示してゐる。この彼を招待せられたしとサティは彼女の父に願ふたが許されず、ために彼女は食を断つて死んだ、又は殺された。シバは、それを知り、悲しみと怒りとに襲はれて、来て、その儀式を汚がし、シャクティの屍を肩にして諸の天をさまよい歩いた。最後にヴィシュヌが彼の円盤をもつて、シャクティの死体を切断する。そしてその断片の落下した処が後にタントラ・センターの有る処となつたと言われてゐる。タントラ・ヤーナはアーリヤンがインドへ持込んだものであらう。

タントラの教は常に極秘にせられてゐて、師から弟子へ、準備が完成した場合にのみ知らされたのである。その教は、多くは口授であり、修行者の心身を浄化し変容せしめるがためのヨーガの指授であつた。その教は、それを受ける者の器量を力説してゐる。成熟せる哲学を得たる者が漸くにしてタントラへ入ることを許されるのである。

タントラが書かれたのは紀元後第三又は第四世紀の頃からである。

その書かれたタントラの源は仏教であり、大乘教のうちのバジュラ・ヤーナから出てゐる。初期の書かれたタントラのうちにはプラジュナパーラミター、グフヤサマージャ、マシジュシユリームーラカルパ及びヘーバジュラタントラがある。

シッダ（超能力者）たるナーガールジュナはニルバーナを空性としてゐる。この説に満足せざる人々があり、そこからヨーガチャラー派が出現する。それより後にマハースクハバーダの哲学が成立する。この哲学は涅槃を目して空と識と大楽（マハースクハ）との三から成るものとする。この哲学思想がバジュラヤーナとして知られることとなり、そして、これを土台として、その上に総べての真にタントラ的なる儀式が定立せられたのであつた。ベノイトシュ・ブハッタ・チャリアは書いてゐる。金剛乗は、極めて明らかに、大乘仏教のうちの瑜伽行学派からの直接の展開であり、この学派は第三世紀のマイトレーヤ・ナートハから発足した、と。

ヒンドゥの伝統の諸のタントラは仏教のよりも後代のものである。

タントラの儀式は第十三世紀初に至るまで、東方インドで大いに盛行したのである

が、その頃にモスレムの侵入者達がそれを破壊したのであった。しかしそれによってタントリズムが絶滅したのではなくて、隠然たる感化を東方の宗教的儀式に及ぼしてゐる。

右は全くのスケレトンであるが、此の第一章の内容は、残りの三章のそれと同様に、豊富であり、多くの暗示をもつてゐる、勿論、異論も出るであらうが。

この一冊を読んで深く感ずるのは同一の根本思想が、人と時と処とによりて、如何に変容するものであるかと、いふことである。空性の思想は大日経のマントラ・ヤーナとなり、唯識の思想は金剛頂経のバジュラ・ヤーナとなつてゐる。そしてこの二は日本においては真言宗となりて密教禪を形成してゐるのである。

このように本書の紹介を書いて来て、私は新らしく多くの疑問の生起するのを経験してゐる。学ばるべきことは無尽に多い。